

〔一〕 次のカタカナの文章に句読点をほどこし、漢字ひらがな交じりの文章に書きかえなさい(漢字で書けるものはすべて漢字で書きなさい)。

ジブンデカンガエルタメニハソノタメノザイリヨウガヒツヨウデスソノザイリヨウトナルジヨウホウヲマズセツシユシナケレバナリマセンデモソノジヨウホウモスベテウノミニスルノデナクジブンデシンケンニムキアツテオカシイトオモツタラコレハオカシインジヤナイカトギモンニオモワナケレバナライソウイウジダイニナリマシタ

〔二〕 次の文章を読んで、あとの問いに答えなさい。

ドナルド・キーン(一九二二年～二〇一九年)は、米国ニューヨーク出身の日本文学研究者である。第二次世界大戦後、コロンビア大学の教授に就任し、古典から現代文学まで広く研究を行って、日本文学の国際的価値を高めるのに大きく貢献した。二〇二一年には東京へ転居し、二〇二二年に日本国籍を取得した。次の文章は、ドナルド・キーンが一年のうち数か月を米国で、残りを日本で生活していた時期(一九八五年四月)に書かれたものである。

日本で暮らしたいと思う本当の理由は、自分の専門分野だけではなく、**①日本に関してできるだけ様々なことを学びたい**という気持ちがある。

(注) 依然として強いからである。そのためには、日本にいるXに越したことはないのだ。日本には、イギリスに住みながらないイギリス文学の教授たちがいることは知っている。あの**②夏目漱石**にしても、ロンドン滞在中、ずいぶん惨めな思いをして過ごしたようである。**③イギリス文学を専攻する**そのような日本人学者と、日本を研究対象としている外国人学者とでは、期待されるものが大いに異なっている。つまり、日本を研究対象とすることは、仕事としてはまだまだ特異なものであり、そのため私たちは、自分の専攻分野だけではなく日本文化全般に

(a) () ことを期待されているのである。私は常にそのような期待に沿うように努めてきたつもりだ。日本文化のあらゆる側面に (a) () ことを求められているばかりではなく、私自身、日本文学の研究者としての自分の仕事にとって、そのような体験が必要だと考えているからである。日本の食べ物を食べたいと思い、歌舞伎を見たいと思い、相撲のこともいろいろ知りたいと思い、祭り見物もしたいと思うのでなく

れば、④専攻する分野でどれほど優れているかと、^(注2)第一級のジャパノロジストにはなりえない——そう言ってもよいのではないかとさえ考
えている。

日本を研究している外国学者の場合とは異なり、イギリス文学を専攻する日本人は非常に数が多いので、その一人一人はイギリスに関し
てあらゆることを知るよう期待されたりはしない。イギリス文学の教授が、イギリスの絵画や^(注3)クリケットや、イギリス料理の調理法に
ついて質問されたりすることはないのである。現在、日本の人々が西欧のことを研究している程度に、西欧の人々が広く日本のことを研究す
るようになる日がやがて来るかもしれない。そうなった^(注4) 暁^{あかつき}には、アメリカやヨーロッパの日本学者たちは、特定の^(注5)文献^{ぶんげん}の判読に
努めたり、特定の政治制度の発展過程をたどる努力を集中させればよくなり、日本を訪れる必要を認めなくなるかもしれない。そういう時代
が到来したら、一部の人々は、日本研究もようやく成熟の域に（b）^(注6) と言って喜ぶだろう。しかし私自身は、それによって貴重なもの
が失われてしまうだろうと考えている。つまり、過去一世紀にわたって、日本を研究してきた外国学者たちを^(注6) 鼓舞^{こぶ}してきた情熱や愛
情が失われてしまうことにならないだろうか。

日本文化のすべてを吸収したいという私の欲求を満足させるためには、多くの時間を日本で過^(注7)すことが最高の^(注7) 方途^{ほうと}である。長く日
本にいと様々な楽しみを味わうこともできる。しかし、⑤マイナス面がないわけでもない。^(注8) 私が夏の間だけ日本にいたころには、友人
たちはしきりに私に会いたがったものだ。私が間もなく日本を去り、九カ月間は戻^{もど}ってこないことがわかっていたからだ。しかしこのごろで
は、長いこと東京にいるのだから急いで会うこともあるまいと思うのだろうか、友人たちは何カ月もの間、連絡^{れんらく}してくれなかったりする。そ
こで私のほうから電話をかけると、雑誌の原稿^{げんこう}の締め切り^{しめきり}が迫^{せま}っているのではとか、著書の仕上げであわただしくてとか、奥さん^{おくさん}（あるいはお
子さん）が風邪^{かぜ}をひいているので治り次第電話をしますから、という返事が返ってくる。それらの返事は決して嘘^{うそ}ではない。しかし、それら
の友人たちにしても、私が二週間しか日本にいないということになったら、雑誌原稿や著書執筆^{しゅつひつ}の手を休め、家族の風邪のことなど忘れて、
会いに来てくれるだろうと思う。言い換えれば、私は日本を訪れている外国人としてではなく、日本^{にっぽん}人として、^(注9) 遇^ぐされるようになってし
まったのである。

かつて私は“余所者^{よそももの}”に過ぎなかった。定期的に友人たちの前に立ち現れるが、それはごく短期間のことであり、彼ら^{かれ}の人生と深くかかわ
ることの決まっていた存在だった。だが今では、友人たちは秘密も打ち明けたりするようにになっているし、⑥彼らの発する“信号”に私が日本
人的に反応することも期待するようになっていっているのである。

かつて友人の一人は、数年間ヨーロッパで暮らしていた別の友人を、「あの男はヨーロッパ惚けしている」と評したことがあった。その人は「信号」に対して適切な反応ができなくなったということであり、日本特有の、最後まで言い切らない表現にも不適應現象を起こしている、という意味だったのだと思う。

私は今では、たいていの場合、言外の意味を理解することができるようになったし、ほとんどの場合、あいまいな返事をした相手が本当は何を言いたいのか推察することもできるようになった。そのことを知っているのも、日本の友人たちは私がすべての「信号」を理解すること期待しており、私とその期待に反したりすると、大いに戸惑うのである。日本で暮らしていると、相手が本当は何を言いたがっているのか理解しようとして、絶えず「信号」に注意を（c）なければならず、そのために神経が疲れてしまうこともある。ニューヨークの友人たちと話をしているときに、何気ない言葉の背後を探る必要もなく話ができたら、どんなに楽だろうと思ったりもする。

日本には過去何百年にもわたって培われた「間接的コミュニケーション」なるものが存在することは、れっきとした事実である。おそらく、鎖国がこの風潮をY助長したものと思われる。お茶のことを「あがり」と言ったり、ご飯のことを「お食事」と言ったり、醬油のことを「むらさき」と言ったりする特殊な用語も、一種の間接的表現であり、特定の環境に置かれた人々にしか通じないものである。客人に帰ってもらいたいと思っているときの表現とか、どこへ行くのかと尋ねられて、行き先を明かしたくないときの表現、だれかの行動に対する不快感を表すときの表現となったら、いよいよ微妙なものになる。それらの「信号」が理解できるのは、その文化の中に生まれ育った人たちか、私のように多大の時間を費やしてその文化を研究した者に限られるだろう。

ニューヨークにおける生活と、東京における生活は、私にとつてかつてまるで異質のものだった。しかし次第に、二つの世界に生きることを、奇妙なことだともショッキングなことだとも思わないようになった。東京の生活は極めて便利かつ快適そのものであり、ニューヨークでは音楽や美術を心ゆくまで楽しむことができるといった違いはあるが、私はその違いを心から楽しんでる。私はこれから先も、一年をこのように二分して生活できればよいが、と考えている。しかし、もしどうしてもいずれかを選択しなければならぬときがきたとしたら、迷わず東京を選ぶことだろう——もっとも、関係当局が許可してくればの話だが……。かつて私は、日本についてあらゆることを学ぶという到達不可能ともいえるべき目標を設定した。私はこれからも、その目標を目指して歩み続けたいと考えている。

（『ドナルド・キーン』二つの母国に生きて』による）

(注1) 依然として…元のまま、変わらず。

(注2) 第一級のジャパノロジスト…非常に優れた日本研究家。

(注3) クリケット…クリケットバットとボールを用いて、一チーム十一人の計二チームで行うスポーツ。十六世紀にイギリスで始まり、十八世紀末には国民的スポーツへと発展した。

(注4) 暁…物事が実現したその時。

(注5) 文献の判読…研究の参考となる書物や文書について、わかりにくい文字や文章を推察し判断しながら読むこと。

(注6) 鼓舞してきた…「鼓舞する」とは、「人を元気づけて物事に立ち向かう気持ちを奮い立たせること」を意味する。

(注7) 方途…方法。

(注8) 私が夏の間だけ日本にいたころ…筆者は一九五〇年代後半は、九月から五月末までコロンビア大学で教え、長い夏休みは京都で過ごすという生活を送っていた。

(注9) 遇される…扱あつかわれる。もてなされる。

問一 波線部X・Yの言葉の意味としてもっとも適当なものを次の中からそれぞれ選んで、記号で答えなさい。

ア くことが条件が良い

イ くことをしなければならぬ

X くに越したことはない

ウ くことは変えられない

エ くことが一番良い

オ くことは当然である

- ア 考え方を正しいとした
 イ うわさをさらに広めた
 ウ 世の中の傾向を強めた
 エ 会話の流れを形成した
 オ 理解の必要性を深めた

問二 傍線部①「日本に関してできるだけ様々なことを学びたい」とありますが、その具体的な例を挙げている部分を本文中から六十字以内で抜き出し、最初と最後の五字ずつをそれぞれ答えなさい。

問三 傍線部②「夏目漱石」とありますが、この人物が書いた作品を次の中から選んで、記号で答えなさい。なお、読んだことがあれば、記号を○で囲みなさい。

- 【解答例】 読んだことがある場合…ア 読んだことがない場合…ア
- ア 注文の多い料理店 イ モモ ウ 西遊記 エ 走れメロス オ 坊っちゃん

問四 傍線部③「イギリス文学を専攻するそのような日本人学者と、日本を研究対象としている外国人学者とでは、期待されるものが大いに異なっている」とありますが、どのように「異なっている」のですか。次の解答欄に合うように、本文中の言葉を用いてA・Bそれぞれ二十文字程度で説明しなさい。

ここで述べられている日本人学者は（ A ）が、
 外国人学者は（ B ）ことが求められている。

問五 空欄 a、b、c に入る言葉を次の中からそれぞれ選んで、直す必要があれば**適当な形に直して**、解答欄に答えなさい。

払う <small>はら</small>	達する	通じる
----------------------	-----	-----

問六 傍線部④「専攻する分野でどれほど優れていると、第一級のジャパノロジストにはなりえない——そう言ってもよいのではないかとさえ考えている」とありますが、なぜそのように考えているのですか。その説明としてもっとも適当なものを次の中から選んで、記号で答えなさい。

- ア 日本文化の研究でどんなに成果をあげても、一つ一つのことを正しく説明できなければ、人々の期待には応えられないから。
- イ 日本文化という専攻分野での研究成果をあげるとは、最も優れている専門家と評価されることにはつながっていないから。
- ウ あらゆる日本文化に触れながら理解した日本語を適切な外国語に翻訳しなければ、日本研究者としての責任を果たせないから。
- エ 体験を通して語る言葉には説得力が生まれ、世界中で通じるものとなるので、それでこそ最も優れた日本研究者と言えるから。
- オ 様々な日本文化を体験したいと思う欲求は、研究と向き合う情熱や愛情とも一体であり、研究者にとって貴重な原動力だから。

問七 傍線部⑤「マイナス面」とありますが、これはどのようなことですか。五十字以内で説明しなさい。

問八 傍線部⑥「彼らの発する『信号』に私が日本的に反応することも期待する」とありますが、

(1) 日本人の友人たちは、筆者とコミュニケーションをする際にどのようなことを「期待」しているのですか。三十五字以内で分かりやすく説明しなさい。

(2) 友人の「期待」に応えるために、筆者は何をする必要があるのですか。それを明確に表現している部分を本文中から十二字以内で抜き出して答えなさい。

問九 本文中における筆者の主張の説明として適当なものにはA、不適当なものにはBを、それぞれ解答欄に答えなさい。

ア 日本文化の研究を行っている一番の理由は、日本を研究対象とする外国人学者が少なく、日本のあらゆる文化をもっと深く伝えることを多くの人々から求められていると強く感じているためである。

イ 日本の研究をしている外国人学者が増えることで、西欧文学の研究と同様に、研究対象を特定の文献にしぼって、政治制度や絵画、スポーツなどの特定の分野の研究が深まることを大いに期待している。

ウ 短期間だけ日本に滞在していた頃は、友人にとつて筆者は定期的に現れる友人に過ぎなかったが、長期滞在をするようになってからは友人の人生にも深く関われる存在になれたことを筆者は喜んでいる。

エ 特定の環境にある人々が理解し合う日本の微妙な表現を、日本文化の外で育った人が理解できるようにするには、実際にその環境で生活して人々とコミュニケーションを重ね、長い時間をかけて努力する必要がある。

オ 日本についてあらゆることを学ぶという達成できそうにない目標を立てたことで、目標を目指して一心に努力を続け、最終的には東京に住むことを迷わず選択することができたのである。

問十 筆者は、海外での経験の中で日本文学と出会い、研究を深めた人物です。あなた自身がこれまでの海外での生活の中で出会い、「研究してみたい」と興味を抱いたことについて、説明してください。まず、いつ、どこで、どのようなことに出会ったのかを説明し、そこからどのようなことを考えたのか、分かりやすく書いてください。

【解答】

一 (20点)

自分で考えるためには、そのための材料が必要です。その材料となる情報をまず、せつしゆ 撰取しなければなりません。でもその情報もすべてうの 鵜呑みにするのでなく、自分で真剣しんけんに向き合って、おかしいと思つたらこれはおかしいんじゃないかと、疑問に思わなければならない、そういう時代になりました。(135字)

(梨木果歩『ほんとうのリーダーのみつけかた』による)

- ・ 基本的に、間違い一か所につき1点減点。
- ・ 「撰取」「鵜呑み」「真剣」は、小学校で学習しない漢字のため、誤字・ひらがなを許容。

二 (50点+30点)

問一 X・エ Y・ウ

問二 日本の食べ く たいと思う

問三 オ

問四 ここで述べられている日本人学者は (A・自分の専攻分野だけを研究していれば良い・19字) が、

外国人学者は (B・それに加えて、日本の文化全般について知る・20字) ことが求められている。

問五 a・通じる b・達し c・払わ

問六 オ

問七 「私」の日本での滞在が長ければ急いで会う必要もないと、友人がなかなか連絡をくれないこと。(44字)

問八 (1) 友人が あいまいな表現をしても、本当は何を言いたいのか 理解すること。

相手が はっきり言わなくても、言いたがっていることの真意を 推察すること。

日本人が 最後まで言い切らなくても 相手の本当の意図を 汲み取ること。

(2) ○言外の意味を理解する

○何気ない言葉の背後を探る

△何を言いたいのか推察する

×何を言いたがっているのか

×“信号”が理解できる

問九 ア・B イ・B ウ・A エ・A オ・B

問十

・海外生活で出会ったこと

……具体性・素材の適切さ

・考えたこと

……意見・内容の深まり

根拠

・文章表現

……全体の構成

言葉遣い・表現